

若狭湾中西部地域における縄文前期初頭の一様相

—志高遺跡最下層出土土器の再検討—

三好博喜

1 はじめに

昭和61年に行った志高遺跡の発掘調査では良好な縄文時代の遺物包含層を調査することができた。最下層出土の土器のなかに爪形文をもつ土器が認められたことから、草創期の土器の可能性があると公表したことがある¹。しかし、その後の調査により、早期末から前期初頭の土器群であることを確認した。このため、本報告では、最下層出土の土器群を早期末から前期初頭の土器群としてあつかった。しかし、個々の土器についてはその系譜を明らかにすることをほとんど行っていない。ここでは、最下層出土の土器について、位置づけを明らかにして行きたい。

2 最下層および出土遺物の概要

志高遺跡の最下層については、昭和61年度の第7次調査時とその後の土層サンプル採取時に遺物が出土している。土層は淡暗褐色粘質土層(12層)および濃灰色粘質土層(13層)である。珪藻分析の結果、13層(縄文時代早期末～前期初頭)では合計39個体(*Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow 11個体、*Naviculamutica* Kuetzing 27個体、*Nitzschia parvula* Lewis 1個体)が検出された。検出種のほとんどは、土壌表層中の好气的環境に特徴的な *Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica* などの土壌珪藻とされるものがほとんどであった。少ないながらも土壌珪藻が検出されたことから、好气的環境下にあったことが推定されている。このことは、13層が当時の生活面である可能性が高いことを示している。

出土した遺物は、70点余りである(第1・2図および第1表)。これらの土器は、3字状刺突文を特徴とする羽島下層Ⅱ式を包含する層位から、0.5m程度の無遺物層(粗い砂層)を置いて出土しており、羽島下層Ⅱ式土器とは全く異なる様相を呈している。

3 関連遺跡の状況

布目遺跡³ 新潟県西蒲原郡巻町大字布目字下り。土器はすべて包含層出土である。ほとんどが前期初頭に位置づけられ、第Ⅰ群(羽状縄文)、第Ⅱ群(斜行縄文)、第Ⅲ群(結節回

転縄文)、第Ⅳ群(その他)の4群に分けている。口唇部に特徴的な爪形刺突列は大部分の資料に施され、底部にも施される例が多い。盛んに用いられる胴部途中の凸帯には爪形刺突列を持つものも多い。この爪形刺突列の刺突原体は明らかに土器製作者の爪である。また、半截竹管状工具あるいは製作者の爪による刺突文をもつ第Ⅳ群土器第1類は、第Ⅳ群土器中最多である。微弱な繊維の混入があり、内面はナデが一般的であるが、擦痕を残すものもある。胴部には凸帯を形成するものがある。

南太閤山I遺跡⁴ 富山県射水郡小杉町南太閤山・下条字笹山。土器は比較的まとまって出土しているが、層位的には混在しており、出土地点も一部を除き重複している。第Ⅱ群土器が早期末葉～前期前葉の土器で、出土土器の主体を占める。第Ⅱ群第8類では爪形文土器を一括しており、この爪形文は口縁部文様帯や胴部に施文されている。指頭圧痕の縁に沿うものがあることから、製作者の爪による刺突もある。また、第Ⅱ群第16-F類は結節縄文のみられる土器で、尖底部に「ハ」の字状の刺突が伴う。

鳥浜貝塚⁵ 福井県三方郡三方町鳥浜字高瀬。80R 1区12層直上で検出された一括遺物は、轟B式の波及とされる土器に、条痕地に押し引き刺突文を伴う未確定型式土器や、清水ノ上I式土器・中国地方の前期初頭の土器に近い土器が共伴している。これらの土器群は、層位的に羽島下層Ⅱ式に先行する。

清水ノ上貝塚⁶ 愛知県知多郡南知多町内海字清水ノ上。清水ノ上I式とされた第二群第1類が前期初頭に位置づけられている。質量ともに清水ノ上貝塚を特徴づけるものである。口縁部の下方に2～8cmほどの幅で縁帯部をつくる。縁帯部の施文により4類型に別れる。A類は縁帯部に細線、口縁部に押し引き刺突文を施す。B類は縁帯部に細線のみを施す。C類は口縁部刺突文のみで、細線は認められない。D類は縁帯部を無文とするもので、口唇部に刻みを加えたものや口唇を押さえてさざ波状に作り、細線を加えたものもある。

磯山城遺跡⁷ 滋賀県坂田郡米原町磯地先。SZ 1群・SZ 2群が早期末から前期初頭に位置づけられている。SZ 1群は、器壁が非常に薄く、胎土中に繊維を含まない未命名の土器群で、5タイプがある。粟津湖底遺跡から類似する一群が出土している。SZ 2群は厚い器壁で、胎土中に繊維を含む。

粟津貝塚湖底遺跡⁸ 滋賀県大津市粟津晴嵐町湖底。SZ 1群・SZ 2群を早期末から前期初頭に位置づけている。SZ 1群は、木島式と総称される土器の一群であり、押し引き沈線文を主とする未命名型式の土器群である。SZ 2群は、型式不明の刺突文・沈線文土器群・所属不明の条痕無文土器である。SZ 2 A類は胴上部がくびれ、そのくびれ部に「ハ」字状の刺突文を帯状に施す土器である。土器の分布から、編年的な位置づけのなかったSZ 1群が羽島下層Ⅱ式より古く、繊維を含む厚手の土器群より新しく、一部清水ノ上I

式に併行する可能性が強いことが明かとなった。

皆木神田遺跡⁹ 兵庫県宍粟郡波賀町皆木字神田・西田。遺物包含層は攪乱を受けているため、詳細な時期区分は不明である。早期押型文土器・轟B式3類併行・羽島下層Ⅱ式併行・北白川下層Ⅰ式併行の土器が出土している。

目久美遺跡¹⁰ 鳥取県米子市目久美町。最下層から出土したZⅠ群土器が前期初頭に当たる土器群である。羽島下層Ⅱ式に比定される土器群の先駆的な存在となっている。ZⅠA類とZⅠB類とが数的に多い。ZⅠA類は、内外面条痕調整を施し、口縁に縁帯を貼付け肥厚させている。ZⅠB類は、内外面条痕調整を施し、細い隆帯を貼付け、刻み目を加えている。ZⅠA類とZⅠB類とでは、互いに影響しあった手法がみられるものの、施文や調整に違いがある。ZⅠB類は九州轟式の影響が強い土器群、ZⅠA類は在地性が強い土器群である。

陰田遺跡¹¹ 鳥取県米子市陰田町。第1遺跡・第7遺跡・第9遺跡からそれぞれ縄文土器を検出した。各時期混在した状態で出土しており、層位的な検出にはなっていない。土器は第1群から第5群が前期初頭に位置づけられている。1群(押し引き沈線文土器)・2群(縁帯文土器)・3群(刻目隆帯文土器)は、九州轟系の影響を強く示す。4群は曾畑系の特徴をもち、5群は条痕文土器である。1群から4群は、主として第9遺跡出土で、第1遺跡では2群土器のみが出土している。このことから、それぞれの出自に少なからず差異があることが明らかとなった。

西川津遺跡¹² 島根県松江市西川津町。包含層から出土した土器は、早期末から前期初頭の時期に限られている。ほとんどが貝殻腹縁による器面調整を行っており、文様を中心に、縄文(1%)・条痕地(18.6%)・刺突文(39.5%)・押し引文(18%)・沈線文(3.1%)・条痕文(3.7%)・隆帯文(6.8%)・貝殻腹縁文(9.3%)に大別している。刺突文系土器(刺突文・押し引文・貝殻腹縁文)は約70%を占め、これらの土器群が示す文様構成が西川津遺跡の特徴となっている。文様構成は、A類(横方向)、B類(斜行)、C類(鋸歯状)、D類(斜格子状または菱形状連結)、E類(曲線)の5類別されている。隆帯文土器は轟B2式にあたり、広範囲に分布する刺突文土器A類と重複あるいは補充するような分布を示している。また、搬入土器として清水ノ上Ⅰ式土器が認められる。

帝釈峽遺跡群¹³ 各遺跡の出土土器の構成はほぼ共通しており、層位的には明瞭に区分できない。

帝釈観音堂洞窟遺跡(広島県神石郡神石町永野南)では、Ⅰ類からⅣ類を羽島下層式の古いタイプに位置づけている。Ⅰ類は九州轟系の隆帯文土器で、約52%を占める。Ⅱ類は隆帯や口縁に肥厚帯などをもち刺突文を伴う土器で、約17%を占める。Ⅲ類は沈線文土器で、

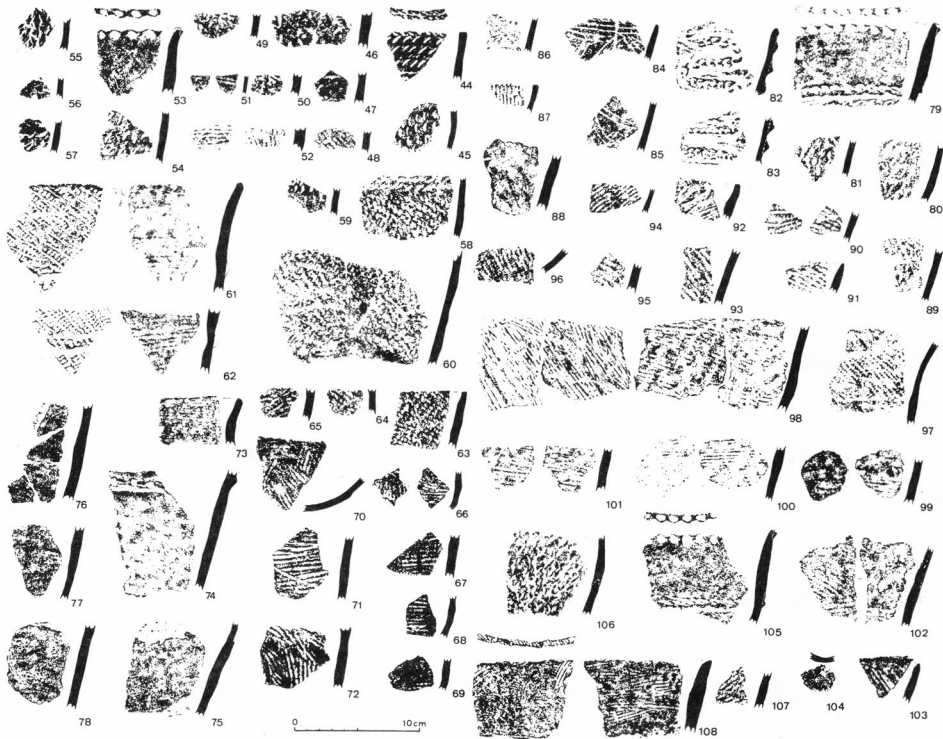
約14%を占める。Ⅳ類は刺突文土器で、約17%を占める。

帝釈馬渡岩陰遺跡(広島県比婆郡東城町帝釈)では、Ⅰ類からⅣ類が羽島下層式の古いタイプに位置づけている。Ⅰ類は刻目刺突文土器で、約10%を占める。Ⅱ類は隆帯に刻目文を伴う土器で、約10%を占める。Ⅲ類は段状の口縁肥厚帯をもつ土器で、約60%を占める。Ⅳ類は沈線文土器で、約20%を占める。

帝釈観音堂洞窟遺跡や帝釈馬渡岩陰遺跡にみられる土器類型の占有率から、羽島下層の古いタイプの土器群には、観音堂Ⅰ類のタイプと馬渡Ⅲ類のタイプとがある。

4 志高遺跡最下層出土遺物の位置づけ

志高遺跡最下層出土遺物の特徴は、縄文施文(33%)と爪形刺突文(23%)の存在で、条痕施文(31%)と共に高い割合を占めている。押し引き刺突の施文手法は、近畿地方では粟津貝塚湖底遺跡や磯山城遺跡・鳥浜貝塚・奈良県大川遺跡・兵庫県山芦屋遺跡・大阪市勝山遺跡・兵庫県神鍋山遺跡、山陰地方では陰田遺跡・目久美遺跡・西川津遺跡などでみられ、前期初頭に一時期を画したことが明らかになってきた。志高遺跡では押し引き刺突の施文手法

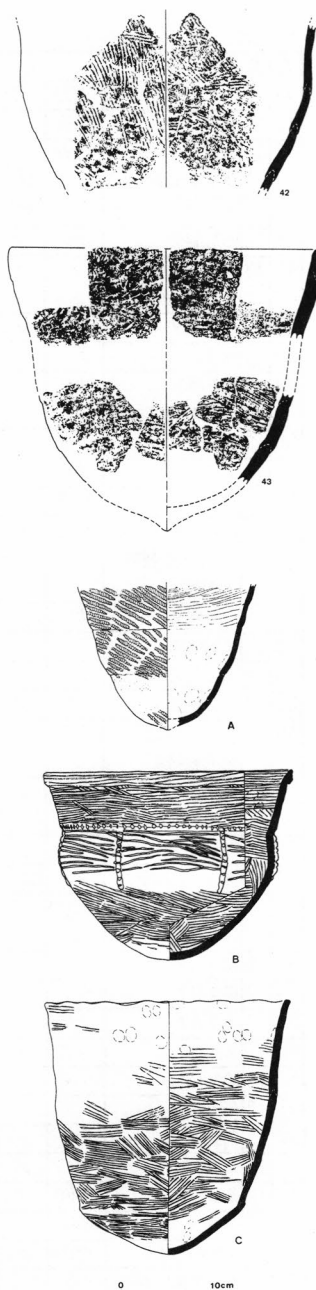


第1図 最下層出土土器実測図(1)
土器番号は、注2文献と対応する。

がほとんど認められなかった代わりに、近畿地方や中国地方ではあまり知られていない爪形刺突文を高い割合で確認した。このことは、早期末から前期初頭にかけての様相が単純ではないことを示しているといえよう。

志高遺跡最下層の時期判断の決め手としたのは、第2図Bの土器である。完形の土器で、口縁部に山陰地方で特徴的にみられた肥厚帯をもち、胴部に九州轟B式の影響を受けたと考えられる刻目隆帯文をもつ。羽島下層Ⅱ式土器の包含層よりも下の包含層から出土したことから、羽島下層Ⅱ式よりも古いことは確実である。また、口縁部肥厚帯や刻目隆帯文が山陰地方に広く分布するのは早期末から前期初頭にかけての時期であることが知られている。また、口縁部肥厚帯や刻目隆帯文が共存する土器は、鳥浜貝塚で出土している。鳥浜貝塚では、条痕地に押し刺突文を伴う土器や、東海地方の清水ノ上Ⅰ式土器が共伴している。これらのことから、志高遺跡最下層出土の土器群は、前期初頭と考えられる。

ここで問題となるのが爪形刺突文の存在である。最下層出土の爪形刺突文の施文具には、土器製作者の爪によるものがあると考えられ、爪形刺突文が単独で文様を構成するものと縄文施文に爪形刺突文が伴うものとが認められる。しかし、当該期の近畿地方周辺地域においては、明かに土器製作者の爪を施文具とした土器群は知られていない。前述したように、日本海側の富山・新潟では、前期初頭に縄文施文に伴って土器製作者の爪を施文具とした爪形刺突文がみられたり、土器製作者の爪を施文具とした爪形刺突文のみの土器も存在している。この時期、九州轟式系統の土器は、石川県佐波遺跡・富山県極楽寺遺跡・秋田県神沢海岸遺跡で出土しており、西からの影響が及んでいる。おそ



第2図 最下層出土土器実測図(2)
土器番号は、注2文献と対応する。

第1表 最下層出土土器観察表

7次調査出土資料

番号	層位	施文			底部	器厚	備考
		外面	内面	口唇			
42	13	条痕	条痕	/	/	8	
43	12	擦痕 + 爪形刺突	擦痕	爪形刺突	/	13	
44	13	爪形刺突	ナデ	刺突	/	6	
45	13	爪形刺突	ナデ	/	/	5	
46	13	縄文(正反の合) + 爪形刺突	ナデ	/	/	8	
47	13	押圧縄文	ナデ	/	/	7	
48	13	縄文RL	ナデ	/	/	5	
49	13	回転縄文 or 押圧縄文	ナデ	/	/	6	
50	13	押圧縄文	ナデ	/	/	6	
51	13	ナデ	条痕	/	/	3	
52	13	条痕	条痕	/	/	9	
53	13	段帯下端 に爪形刺突 + ナデ	擦痕	押圧	/	9	○
54	12	爪形刺突	ナデ	/	/	7	
55	12	爪形刺突	ナデ	/	/	5	
56	12	爪形刺突	ナデ	/	/	5	
57	12	爪形刺突	ナデ	/	/	5	
58	12	縄文(3本撚り) + 爪形刺突	ナデ	/	/	7	
59	12	縄文RL + 爪形刺突	ナデ	/	/	5	
60	12	縄文RL	擦痕	/	/	8	
61	12	縄文(付加条)	条痕	なし	/	8	☆
62	12	縄文(付加条)	条痕の ちナデ	/	/	7	☆
63	12	縄文(複節)	擦痕	なし	/	7	
64	12	縄文RL	ナデ	/	/	6	
65	12	縄文RL	ナデ	/	/	6	
66	12	条痕	条痕	/	/	5	
67	12	縄文RL	ナデ	/	/	7	
68	12	条痕	ナデ	/	/	5	
69	12	条痕	ナデ	/	/	6	
70	12	条痕	ナデ	/	角形	5	
71	12	条痕	条痕	/	/	7	
72	12	条痕	条痕	/	/	8	
73	12	条痕のちナデ	ナデ	なし	/	8	△
74	12	段帯下端に刺突 + ナデ	ナデ	/	/	8	△
75	12	ナデ	ナデ	/	/	8	△
76	12	ナデ	ナデ	/	/	8	△
77	12	ナデ	ナデ	/	/	7	△
78	12	ナデ	条痕の ちナデ	/	/	8	△

※備考欄の印は、同一個体ないし酷似する個体

※繊維を混入する資料は確認できていない。

土層サンプル採取時出土資料

番号	層位	施文			底部	器厚	備考
		外面	内面	口唇			
A	間	縄文RL	条痕	/	尖底	7	
B	間	口縁部 = 肥厚帯に条痕 ----- 体部上半 = 条痕 + 下端に刻目 体部下半 = 刻目隆帯 + 沈線文 ----- 底部 = 条痕	条痕	なし	丸底	7	
C	間	条痕	条痕	押圧	丸底	7	
79	間	段帯下端に爪形刺突 + ナデ	擦痕	押圧	/	口縁9 体部6	○
80	間	爪形刺突	擦痕	/	/	6	
81	間	爪形刺突	?	/	/	6	
82	12	隆帯上刺突 + 押引き平行刺突	ナデ	刺突	/	6	◎
83	間	隆帯上刺突 + 押引き平行刺突	ナデ	/	/	6	◎
84	12	隆帯上刺突 + 押引き平行刺突	ナデ	刺突	/	6	◎
85	間	押引き平行刺突	ナデ	/	/	5	◎
86	間	押引き平行刺突	ナデ	/	/	5	◎
87	間	短沈線	ナデ	刺突	/	6	
88	12	ナデ	ナデ	/	/	8	△
89	13	縄文RL	ナデ	/	/	6	
90	12	縄文(付加条)	ナデ	/	/	7	
91	13	縄文RL	ナデ	なし	/	7	
92	13	縄文(無節L)	ナデ	なし	/	6	
93	13	縄文RL	ナデ	/	/	6	
94	13	縄文LR	ナデ	/	/	5	
95	13	縄文LR	ナデ	/	/	6	
96	12	縄文RL	ナデ	/	/	6	
97	間	縄文RL	ナデ	/	/	6	
98	13	条痕	条痕	/	/	8	
99	間	ナデ	ナデ	/	/	7	△
100	13	条痕	条痕	/	/	8	
101	間	条痕	条痕	/	/	8	
102	12	条痕	条痕の ちナデ	/	/	7	
103	間	条痕	?	なし	/	7	

7次調査試掘時出土資料

番号	層位	施文			底部	器厚	備考
		外面	内面	口唇			
104	間	ナデ	ナデ	/	尖底	6	
105	間	段帯下端に刺突 + ナデ	擦痕	押圧	/	9	○
106	間	爪形刺突	ナデ	/	/	8	
107	間	爪形刺突	擦痕	/	/	6	
108	間	条痕	条痕	押圧	/	10	

※層位欄の「間」は、12・13層間

らく日本海沿岸の北陸・東北地方からも西へ影響を与えたことが予想され、最下層出土の爪形刺突文に具現化されているものと現時点では理解しておきたい。

縄文施文の土器群は体部小片が大半で、全体像を知り得る資料は少ない。施文された縄文は、単節RLが50%を占めているが、付加条をもつものや複節になるもの、正反の合によるものなどがあり、縄原体にバラエティーが認められる。爪形刺突文同様東からの影響を受けたものであろう。底部資料として第2図Aがある。明確な尖底であり、この時期まで縄文施文尖底土器があることがわかる。繊維は認めがたい。付近のこの時期の遺跡としては、京都府網野町宮ノ下遺跡や京都府大宮町裏陰遺跡が知られている。宮ノ下遺跡では層位的に出土しており、外面に無節または単節縄文を施し、内面を植物茎による条痕で仕上げた平底の繊維土器の宮ノ下I式・内外面に単節縄文を施した、おそらく尖底の繊維土器の宮ノ下II式の型式設定が行われている¹⁴。裏陰遺跡では包含層から出土した早期末から前期初頭までのなかに、繊維土器で、表裏縄文でも内面上部にだけ縄文が施されたものや、縄文施文尖底土器がある¹⁵。第2図Aは口縁部文様が不明であるが、裏陰遺跡出土例のように内面上部に縄文をもつ表裏縄文となる可能性もあり、宮ノ下II式との関連が考えられる。なお、宮ノ下I式・宮ノ下II式は、押型文と羽島下層諸型式との間に位置づけられた近畿北部の土器型式ではあるが、近畿北部での類似資料の出土が少なく明確な位置づけを得ていない。おそらく志高遺跡最下層土器群の直前段階に置かれるものと思われる。

53・79・105は、幅広の縁帯部をもち、縁帯部下端に上下から刺突を施している。口唇部にさざ波状の押圧を加えるなど、清水ノ上I式D類に近似した特徴をもつ。74も類似した縁帯部をもっている。61は胴部上半に凸帯をもつ布目遺跡出土例に近いと思われる。82～86は同一個体で、蛇行する隆帯上や口唇部に半截竹管状工具内側で押し刺突を加え、器面にも同様な刺突で幾何学模様を描いている。現在のところ出自を明らかにできない。この時期盛行する押し刺突文の施文原体は方形状を呈しており、施文原体の差異とすることが可能であれば、隆帯文土器と押し刺突文土器との変形折衷型とできるのかもしれない。また、短沈線文土器は竹ノ花遺跡や帝釈観音堂洞窟遺跡・帝釈寄倉岩陰遺跡で隆帯文土器や刺突文土器に伴って出土しており、87の短沈線文との関連が予想される¹⁶。

以上のように志高遺跡最下層出土土器は、多くの要素を含んでいる。以下では今後の検討課題として前期初頭若狭湾中西部地域の土器様相を整理しておく。この時期主体となるのは、宮ノ下式以来の縄文施文土器と条痕文施文の土器であろう。また、中国地方で明瞭な区別がなされていた隆帯文土器と縁帯文土器は、近畿北部の志高遺跡や鳥浜貝塚にあっては、両者の折衷型として成立している。土器製作の際に働いていた何らかの規制が近畿北部に至って曖昧なものとなったのであろうか。志高遺跡では明確な押し刺突文土器が

確認できなかったことから、この土器の分布の中心は近畿中部から中国地方にあるものと思われる。清水ノ上Ⅰ式土器や各種縄文・爪形刺突文などと共に若狭湾中西部地域に影響を及ぼした土器群としておきたい。

末筆ながら、志高遺跡縄文時代の調査ならびに整理に際しては、多くの方々にご指導・ご教示や資料の提供をいただいた。未だ十分な成果を揚げられないのは、偏に筆者の勉強不足によるものであり、今後に残した課題は多い。

(みよし・ひろき=当センター)

- 1 三好博喜「志高遺跡出土の縄文時代草創期の土器をめぐって」(『京都府埋蔵文化財情報』第25号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 2 三好博喜ほか『京都府埋蔵文化財報告書』第12冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989
- 3 小野 昭・小熊博史「巻町布目遺跡の調査」(『巻町史研究Ⅲ』 巻町) 1987
- 4 岸本雅敏・山本正敏『南太閤山Ⅰ遺跡』富山県教育委員会 1986
- 5 福井県教育委員会・若狭歴史民俗資料館『鳥浜貝塚1980～1985年度調査のまとめ』 1987
- 6 山下勝年ほか『清水ノ上貝塚』南知多町教育委員会 1976
- 7 中井均ほか『磯山城遺跡』米原町教育委員会 1986
- 8 泉拓良ほか『粟津貝塚湖底遺跡』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1984
- 9 波賀町教育委員会『皆木神田遺跡』 1984
- 10 小原貴樹ほか『日久美遺跡』米子市教育委員会 1986
- 11 植田真ほか『陰田遺跡』米子市教育委員会 1984
- 12 内田律雄ほか『西川津遺跡発掘調査報告書(Ⅲ)』島根県土木部河川課・島根県教育委員会 1987
- 13 中越利夫「帝釈峡遺跡群出土の縄文前期土器の研究(1)」(『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会) 1986
- 14 岡田茂弘「縄文文化の発展と地域性—近畿—」(『日本の考古学Ⅱ』縄文時代 河出書房)1965
- 15 長谷川達ほか『裏陰遺跡発掘調査概報』大宮町教育委員会 1979
- 16 河瀬正利「山陰地方の縄文早期・前期土器の様相」(『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報Ⅶ』広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室) 1985

〈参考文献〉

- 宮本一夫「近畿・中国地方における縄文前期初頭の土器細分」(『京都大学構内遺跡群発掘調査研究年報昭和59年度』京都大学埋蔵文化財センター) 1987
- 山口信義「隆帯文(轟B式)土器研究ノート」(『研究紀要』創刊号 (財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室) 1987